

緊急連載上

「娘を殺した」

過労死
従業員遺族が「公認取り消し」
直訴で自民と乱闘

自民党本部への申し入れの前に
会見に臨む遺族



**殺意を持って殺した後は責任を
取らないのか**

災の責任を認めようとしません。私たち遺族に正面から向き合おうとせず、娘の死の実態調査を求める遺族が納得できるような説明をしようとしません」

遺族が自民党に要請したのは2点だけだ。渡邊氏の公認の撤回とブラック企業対策、過労死防止対策に全力で取り組むこと。この要請文を手渡したあとも押し問答が続けた結果、ようやく森さん夫妻と支援する労組代表の3名だけが党本部

「若者が夢を持てる社会を作る」
の主張は本当か？

立場が異なる自民党関係者に
遺族が激高する場面も……

渡邊美樹前会長に告ぐ



直々に出馬を要請した
総理の責任は重い

夢を実現する端緒についたばかりで、道を断たれた若き女性がいる。しかも、「過労死」という最悪の結末によってだ。その責任を認めることなく、経営者は国政選挙に打って出ようとしている。「娘はいったい誰に殺されたのか?」。こらえていた遺族の感情はついに破裂した。公認撤回を求め直談判に挑んだのだ。

党本部前は喧騒に包まれた

「私たちは苦しんできたのです。娘が過労自死した遺族の気持ちかわからないのか! 毎日毎日、泣いているんだよ、俺たちは! 頼むからついでにくれよ」
遺族はそう叫ぶと、針が飛んだレコードのように「面会拒否」を繰り返す自民党の施設管理者に、つい手が伸びて胸倉をつかむような格好になった。
確かに、口調は怒りに満ちていた。しかし、胸倉に当てられた遺族の手は、やり場のない怒りをぶつけただけのものではない。遺族の表情はクシャクシャで涙すら浮かんでいた。党本部まで案内していただけないでしょうか。娘は寒い雨の中、死んでいったのです。

があった。ところが、そこに待ち受けていたのは、先の施設管理者だった。「石破幹事長に要請をした」と申し入れてあります。そう訴えても、敷地内にすら入れようとしていない。そして、遺族と施設管理者の距離は縮まり、冒頭のような状態になったのだ。遺族から無念の思いをぶつけられても、自民党の対応は変わらなかった。致し方なく豪さんは門前で、「自民党は、若者を死ぬまで働かせ、殺す社会をつくりたいのですか!」

と、みずから書いた要請文を読み上げ始めた。「自民党は7月の参議院選挙比例区の候補として、ワタミ株式会社の渡邊美樹前会長を擁立されると聞いていますが、素朴な質問に答えていただきたい。法律違反を重ねて利益追求をした経営者に、国会議員になる資格があるのでしょうか? 国の機関である労働局は私たちの娘の死に對し、ワタミフードサービス株式会社に於ける業務上の労災による死亡との決定を下しました。しかし、渡邊前会長およびワタミフードサービスは、労働

内に入ることを許された。数分後、退出してきた遺族の表情は厳しかった。「1人の国会議員にも選挙担当者にも会えなかった」この日は、約1000人の支援者が森さん夫妻を後押すべく集まっていたが、

渡邊氏は選挙準備を進める

その後、自民党本部前の路上抗議集会では、シニョレヒコルが行われた。「遺族の思いを受け止めろ！」

しかし、こうした叫びは渡邊氏には届いていないのだらう。馬耳東風ののごとく、着々と参院選へ向けての準備を進めている。6月27日、渡邊氏は非常勤の会長職を辞し、選挙だけに自身の活

着々と選挙準備を進める渡邊氏

その支援者とともに、路上での抗議集会へと移った。遺族とともに参加者が1分間の黙祷を捧げたあと、森夫妻が要請行動の報告と支援者への礼を述べた。涙を浮かべた森さんの表情には悔しさがにじんでいた。

企業の仕事としては、大きくできると感じていたやさき、安倍晋三総理(58)から声がかかったというのだ。そして、手紙はこう続く。「国民の幸せ」を必ずや実現します」

選挙公約とも読める文面に選挙期間中以外の選挙活動を禁じた「公職選挙法違反ではないか」との声が上っている。

「本社8階まで階段で上がれ」

これまで遺族が言い切らざるをえないのはなぜか。美菜さんが亡くなったのは08年6月12日未明のことだ。美菜さんが飛び降りたマンションの踊り場に置かれていたのは白い傘だけだった。遺書もなく不審に思った遺族は、美菜さんの死の真相を追い求めた。



自民党本部前には多くの支援者が訪れた

休日も課題のレポート作成、ボランティア活動への参加を強いられるという。まさにブラック企業的な労働実態であった。例えば、

本誌ではなく遺族に抗議した

遺族が美菜さんの死の真相を追求めた結果、12年2月に労働局が過労死と認定。労働局は美菜さんの1カ月の残業時間は141時間と認めたのだ。

この点数からも、美菜さんがワタミの理念に疑問を抱いていたことがわかる。天引きで購入する渡邊氏の著書を読んだのレポート提出。さらには、ワタミ社員の基本精神を記した「理念集」のテストだった。

遺族は気丈にもこう話した。「いえ、気にしないでください。私たちが取材に答えたいのは、世間に娘の死を広げ知ってもらい、娘と同じような思いをする若者を1人でも多く救うためなんですから」

つて、調停が継続中である状況下で、その内容につきましては第三者にお伝えすることは差し控えていただきたいと思います。ご理解のほど宜しくお願いいたします」すでに、その調停ではワタミ側は「源泉徴収票など3つの質問以外は答えない」ことを示し、実質的な調停打ち切りを宣告しているに等しい。

ニース

「アサヒ芸能」スマートフォンのみで、<http://asahi.jp/>

れているのは、給与からの

入れた調停が開始したが、評論家的な曖昧な答えが多く、核心部分の質問に対す

会見後に詳しく聞くと、

「ご遺族様からのご質問に

「若者を死ぬまで働かせ、殺す社会を作る」つもりなのではと思われてもしかたあるまい……。(以下次号・取材協力/ジャーナリスト・横田)